

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.5

さて、ご助めの寝たばこがもとで拙者らの番小屋が燃えてしまったことはお話し申したな？

その際は殿様のご厚情により叱責ですみもうしたが、鍋釜ほか家財一切を火災で無くした拙者らは住むところも失ってしもうたのじゃ。

そんな拙者らの為に殿様が共済の補償金を使い、新たな番小屋を建ててくれることとなり申したのじゃが、暫時、主家から一町^{いっちょう}（意：約 109m）ほど離れた奥方様の実家の庭に建っておった空き家に身を寄せ、仮住まいすることと相成り申したのじゃ。



奥方様の手前言いにくいことではあるが、まあ粗末な空き家でな、玄関の戸は取り払われ、天井は無く、むき出しの小屋裏を見れば梁や束も無く、がらんとこの空間に細い棟木だけが見てとれる有様じゃった。更には前の住人の生活臭、これがまたきつかった。表札には「ポチ」と書かれておったが拙者には「ポチ殿」が何者かを知る術はござらんかった。

とにかく、こうして拙者らの仮住まいは始まったのじゃが、その初日からご助めが

「旦那様、こんな所なら主様のお屋敷の庭で野宿の方がよろしいのでは。臭おて耐えられませぬ！」と、毎日のようにおめき（意：喚く^{わめ}）散らすのを「うるさい！もとはと云えば、そなたの寝たばこの不始末であろうが！」と叱るのが日課となりもうした。

その頃の備忘録を紐解くと、乱れた字で『今日も諭す。中間としては中の中、いや、中の下働きしかせぬものを要求だけは一丁前のご助や如何に！』とある。今読み返しても、ほれ、はらわたがキリキリと・・・いかん、いかん。

ところで、仮住まいから市民家への一町は殿様から拝領した鹿毛^{かげ}（意：茶褐色の馬）に乗り、卯の正刻（朝6時）に入り、お勤めを果たした後、亥の正刻（午

後 10 時) に再び騎乗し、下がりますが、何を隠そう拙者は乗馬が得意でして
な、松平 ^{なにがし} 某 の暴れん坊將軍ばりで颯爽と宮腰 (金石) から粟ヶ崎の海岸沿い
を駆け抜けること、そして何時かは金沢百万石まつりで利家公の馬廻役を務め
ることが夢でござった。



愛馬の名は「リオ」。腕前は、粟ヶ崎のヴィテン調練場において 5 級のお墨付と
並足免許皆伝だったのじゃ。懐かしいのお。どれどれ、備忘録の続きを・・・。

6 月〇日。昨夜の提灯行列に続き、祭りのメインイベント百万石行列当日。寅
の終刻 (朝 5 時) 「リオ」に跨り主家に向け仮住まいを出立する。ご助、仮住ま
いが臭い、祭りを見に行きたい、一週間も甘酒を飲んでいないなどと不満を言
い募る。暫く聞き流し捨て置きしが、不満や悪口が奥方様の実家のことにまで

及ぶに至り、捨て置く訳にもゆかず「馬鹿者が！その辺にせよっ！」と大喝すれば、ご助不貞腐れ路傍の石を水田に蹴りこむなり。

ここまでか？はて？この後どうしておったかのう・・・おっ、続きがあったぞ！

「不届き者め！田に石を蹴りこむとは何事ぞっ！」と諫む（意：叱る）べく馬上で前かがみし折、投石に驚いたカワズ（蛙）がリオの前足めがけ飛び跳ねて来たりぬ。

ヒヒーンッと棹立つリオ、その背で支点を失った拙者の体はゴムまりのように跳ねると、もんどり打ってドオッと下馬の地藏堂（石引2丁目地内か？）の前に落ちいたれり。



背をしたたかに打ち、息が出来ず叱る声も出せない拙者に駆け寄るご助。

「ひっ、ひいっ、旦那様、御無事ですかい？」と心配する言葉とは裏腹に、ご助の顔が必死に笑いをこらえているのを拙者、見逃さざるなり。

一呼吸、大きく息を吸い込み、あらん限りの大声で「馬鹿者っ」と叱れば、次には（今度は）リオが驚き逃げ出しぬ。

「おっ、追えっ、ご助！」と命ずる拙者の声に遅れ、漸くリオを追いかけ駆け出すご助。

追いかけてながらも、ご助が腹を抱えながら

「リ、リフォ、リーフォ、ひ、ひいいひいっひい、リフォオ」と叫ぶ姿も見逃さざるなり。

そうであったな。結局、リオは見つからず、キゴ山の放牧場あたりを見慣れない馬が疾走していたとの情報が最後となっておる。

愛馬を失ったショックとご助との間に生じた大きな溝で、落ち込んだ拙者を救ったのは、意外にもご助でござった。

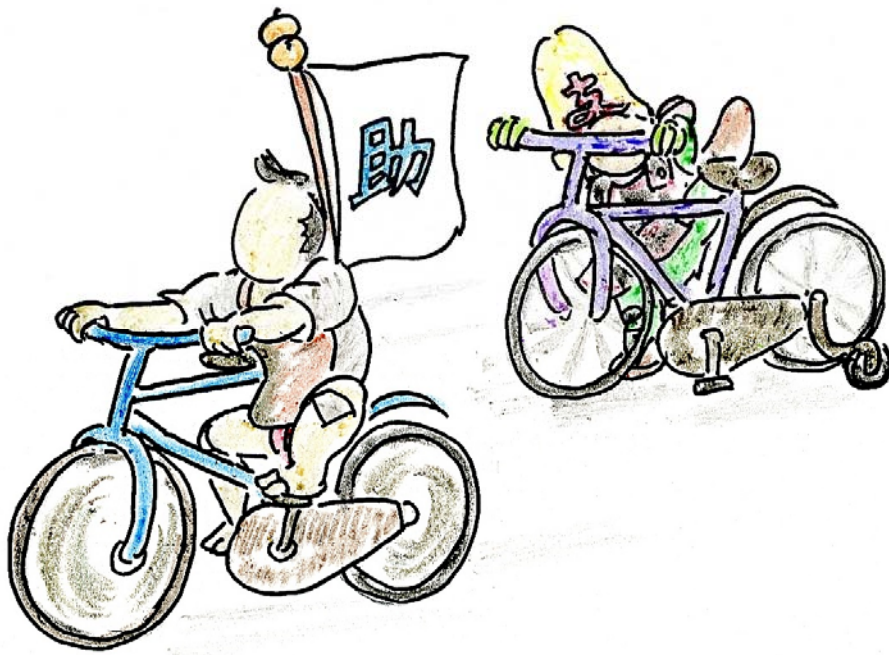
毎日のお勤めを終えた夜半から早朝にかけ、ご助はリオを探してキゴ山から戸室を巡っておったそうで、「リオオ、リオや～い。居たら返事してくれえ。リオ～。」と呼び続ける姿を不審、いや、不憫に思うた戸室のリサイクル推進室長が計らいで、中古の自転車を2台、調達してきたのでござるよ。

1台は紫色でスチール製、もう1台は青色でアルミ製。

旦那様には頑丈なスチール製を色目も高貴な紫色でござれば是非ともこちらをと、ご助め可愛いことを申すものよと、瞬時に拙者のご助へのわだかまりは氷解したのでござるよ。と、備忘録の結びには書いてあるな。

しかしながら自転車というもの、なかなかに乗りこなすのが難しいものでござる。

大体がペダルに足が届かぬ。稽古の度、拙者は思案橋（菊川 2 丁目）で思案に暮れておったのじゃが、ご助の方は身軽なもの、数日を経ずして前田家に伝わる『三角乗り』をいとも簡単に会得してしまったのじゃった。



拙者はといえば漸く右の補助輪が取れたものの、頑丈なスチール製だけのこと

はあって、重い車体の操作に手こずっておったものじゃ。

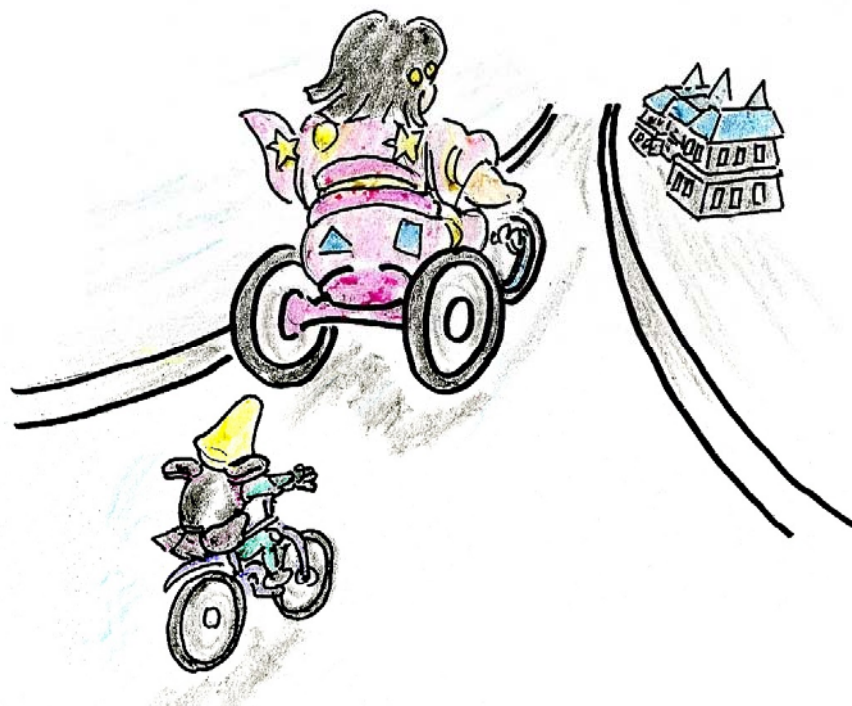
そんなある日の午後、主家の庭で件^{くだん}（意：例の）の自転車稽古に励んでおったところへキコ、キコ、キコの音とともに三輪車に乗った援姫様が現れたのでござる。

自転車に乗った拙者らを見つけると援姫様は

「ちえん、おま（馬）には、いちゆのせちえくりえるの？」過ぎし日、援姫様が4歳の頃でござったか、戯（たわむ）れに姫様がいい子にしておればリオに乘せて進ぜると申し上げたことを援姫様は覚えておったのじゃ。

「う、馬は・・・今はおりませぬ。」と申し上げれば

「ちえんはうちよ（嘘）ちゆきか？援はうちよちゆきはきれいじゃ。」と泣きながら三尖塔（飛梅町：旧金沢二中。現・金沢くらしの博物館）の方向へと三輪車を走らせ給うたのじゃ。



「ひ、姫様！ご助追うのじゃ！」と拙者のご助は姫様の後を追ったのでござる。

成巽閣辺りでようやく追いついたものの、三輪車を走らせ続ける姫様にリオが逃げ出しまだ帰って来ぬことをお話しし、ようやく姫様が三輪車の歩みを止められましたのは、前田家の居城、金沢城公園の二の丸広場でござった。

「ちえん、おま（馬）によことはあい分かった。帰りようとおもうが、ちゆかれてもう漕げにゆ。」と申される姫様に

「拙者らがお引きいたしまする。それ、ご助。」とご助を呼びますれば、ご助答えて曰（いわ）く、

「旦那様、私の自転車はアルミ製で弱く、けん引は出来ませぬ。旦那様とお代わりしたくても旦那様は補助輪なしの自転車には乗れぬでしょうから・・・旦那様・・・どういたしましょう。」と。

「むむむっ、いた仕方なし・・・では姫様、参ります。」結局、拙者の自転車に結わえたロープを姫様のおん手にお渡しし、けん引いたすこととした次第でござる。

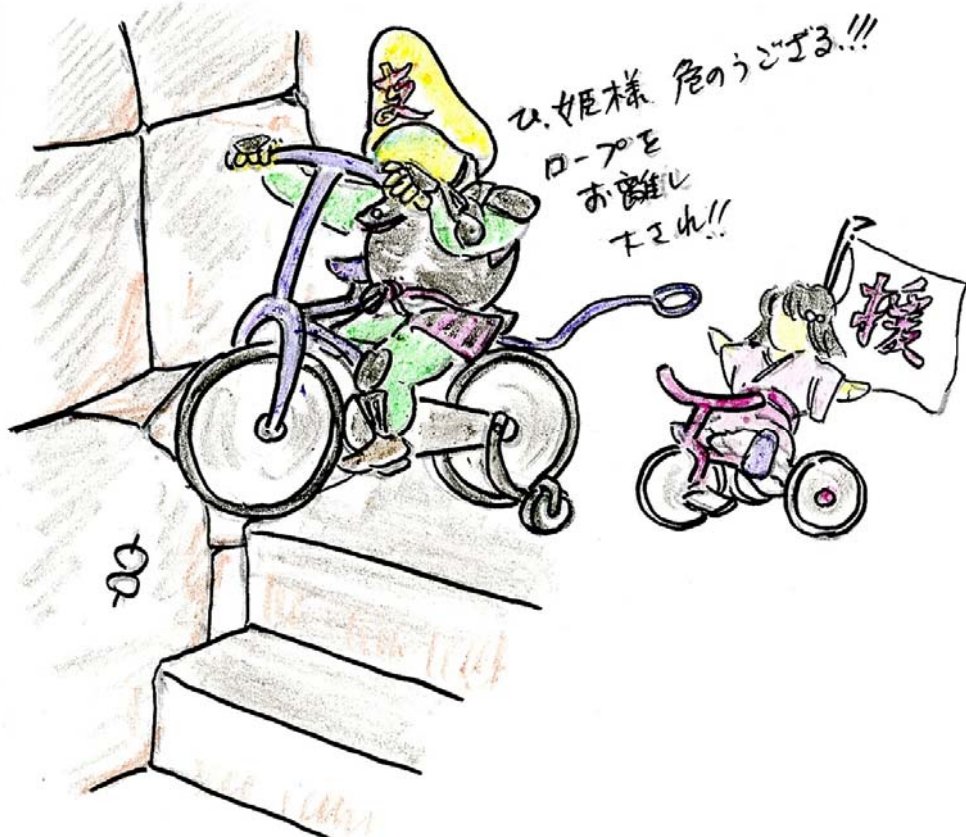


「オーエス、オーエス、がんばれ旦那様、それ引け旦那様。」器用に三角乗りをするご助の応援を受けながら援姫様の乗る三輪車をお引き致せども、自車の重みも加わり四半刻を経ても一町も進まない有様で、石川門の石垣を遠目に見るにいたり「ええい、ままよ！（どうにでもなれ!）」と禁じ手の等身の術を使いまして候。

四尺の大男に変じた拙者の漕ぐ自転車のスピードは凄まじく

「ちゅごい（凄い）あははは、ちえんちゅごいな。」と三輪車の姫様が感動する間もなく、アッという間に石川門の階^{きざはし}へと差しかかり候。と、その時、眼前に『まいどさん』の案内コーナーが。このままでは援姫様の御身に危害が！！

「ひ、姫様、危のうござる！ロープをお離し下され！」と注進し後ろを見やれば、姫様、疾^とうの昔（意：ずっと前）におん手からロープを投げ捨てられ候。やれやれ危機管理の出来たしっかり者よのおと感心しながら、拙者は自転車ごとまいどさんのコーナーへと飛び込んだのでござる。



「ひっ、ひいっ、旦那様、御無事ですかい？」と心配するご助の声。

以前にも覚えのあるその声と必死に笑いをこらえる顔を拙者、見逃さざるなり。

それはさておき、まずは姫様のご無事を確認せねばと

「ひ、姫様はご無事か？」とご助に尋ねしが、ご助

「あれれ？さっきまでここにおいでたのですが？」との答えにて要領を得ず。

拙者、石川門から兼六園の方を見やれば、とんずらを決め込み三輪車を必死に漕ぐ姫様のおん姿を認めけり。

「・・・まあ・・・姫様のご無事で・・・なによりじゃ。」と精一杯の男気と虚勢を張った次第でござる。

「だ、旦那様！姫様を行かせてしまって良いんですかい？旦那様も私も先の火災で文無しですぜ。」と慌てるご助に、笑いかけながら

「ご助。何のために共済がある？拙者らは個人賠償責任保険に入っておろうが。大丈夫じゃ。」と。

そうでござる、このようなときの為に日常生活の中で起きる不慮の事故を補償する火災共済の付帯保険はあるのでござる。

「だ、旦那様、付帯保険は・・・」と、ご助が続けて申しますのを押しとどめ補償交渉を進めようとする拙者に

「だから、だから、だから旦那様、私らの個人賠償責任保険は燃えた番小屋の付帯保険ですう。」と。

燃えた番小屋の付帯・・・保険？いかん、拙者は仮住まいしてから火災共済にも個人賠償にも入っておらぬ。

既に豆粒ほどにまで小さくなった援姫様の後を追ひ、この場から逃げ出したいくなる衝動を必死に抑え愛想笑いを交えながらまいどさんの案内コーナーへと向き直れば

「おお、凄い風やったな。机が倒れてしもた。じゃまなかったかいや。」

「なーん、じゃまないちゃ。」

「ちゃんと脚の重ししとっこっちゃ。」

「いいがや。今日はこんでしまいやさけ。」

「ほんでもおさっきの三輪車の子は凄くなかったかいや？」

「あんたもみとったんか？」

「おいや、この辺までキーコ、キーコと漕いどったんに、アツと言う間に兼六園やろ。」

「あんな脚使こうが、福井にもおらんぞ。」

「福井？あはは、競輪かい。」

「ははは、ほんならまた明日。さいなら。」

「ほんなら、さいなら。」

と、まいどさんは要領よく机を片すと夕暮れの金沢城を後にしたのでござる。

それから長い間、拙者のご助は石川橋の上で佇んでおったが、空腹に耐えかねたご助が

「旦那様。もう帰りましょうぞ。」と泣きを入れてきましたな、主従で自転車を連ね兼六坂を登り帰途についたのでござる。

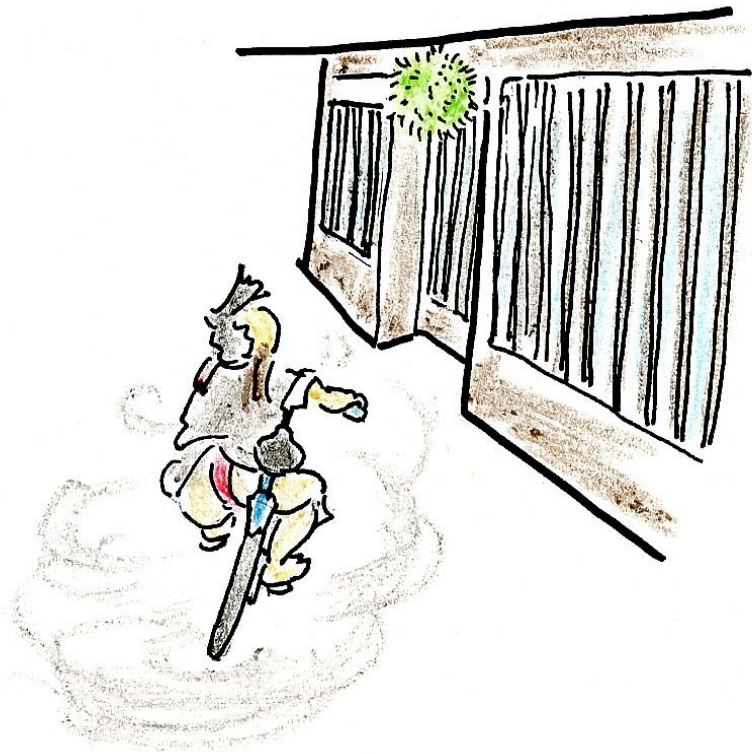
道すがら「旦那様、あの臭くて粗末な仮住まいにも火災共済や付帯保険を掛けますので？」とご助が聞いてくるのに

「勿論じゃ。われらは市民家の安全安心を任されておるのじゃ。忘れるでない。」と答えながら、迂闊にも拙者自身、付帯保険の制度を忘れておったことを恥じ入った次第でござる。

さらにご助が「旦那様、ねえ、旦那様、コーナーの弁償しなくても済んだんだし、福光屋で甘酒買って帰りましょうよ。」と言うのを

「ダメじゃ。まだ番小屋を燃やしてから一月も過ぎておらぬのに甘酒など買え

るものか。」と撥ねのけ、家路を急ぐ拙者の自転車の周りを三角乗りのご助は行きつ戻りつしながら「旦那様、あの臭くて、粗末な仮住まいでは甘酒でも飲まないで寝られませんてっ。旦那様、もう一か月も飲んでませんぜ。」と更に言い募るご助を無視しながら下馬の地蔵堂に差し掛かったのでござるが、寝たばこの不始末を忘れ、あまりにもしつこく甘酒を無心するご助に、とうとう拙者の堪忍袋の緒も切れ「馬鹿者っ」と大声で叱ったのでござる。



と、その途端、それまで地蔵堂の前に佇んでいた大きな影が立ち上がるとヒヒーンと^{いなな}嘶きを残し駆け去っていったのじゃ。

「リオ！あああ、拙者のリオがあ！」やっと帰ってきた愛馬がまた逃げてしまったのじゃ。

「ご助え！こんどは許さんぞ。どう始末をつける気じゃ！」と叱りますれば、
当のご助少しも慌てず

「大丈夫でござる。旦那様は気づいておられぬのじゃ。先刻から旦那様の左の補助輪は浮いており申す。もうリオに乗らずとも、どこへでもスイスイと行けますぜ。」と。

なるほどそうじゃった。あの日が拙者の自転車記念日じゃったな。

ええっと・・・備忘録もたまに読み返すと色々と思い出されて面白いものじゃな。
思い出にはまだまだ続きがあるが、もうそろそろ援姫様が幼稚園から帰られるころじゃ。この続きは、また今度じゃな。(つづく)